

メジロの子育て

増田一比古

5月の連休明けの頃、リビングのガラス戸の目の先にある白のナミズキの木(Fig.1)にメジロが頻繁に飛んでくるようになった。注意して観察しているとどうやら巣作りが始まったようである。2羽が交代々々口に白い紐のようなものを啜えて飛んでくる。枝に止まって懸命に巣を編み始めた。見事な作業である。



Fig.1

少し木の上の方を覗いてみると、半分ほど作りかけて放棄した中途半端な巣が一つ見える。どうやらここはあまりうまくないと判断して新しい場所に新規に再建しているようだ。



Fig.2



Fig.3

数日後、どうやら巣が完成し、産卵したらしい。雄雌交代での抱卵が始まった。写真(Fig.2, 3)

で御覧頂けるように、木の葉のほんの僅かの隙間から覗いて、その姿を見ることができる。さあ、いつ頃、雛が誕生するだろうか。それまで外敵に襲われないだろうか。

カメラ2台を準備する。一つには300mmをもう一方には540mm相当のレンズを装着した(Fig.4)。



Fig.4

540mmで覗くとFig.3のようにかなり大きく近写できるが、レンズの組み合わせの関係で手振れ防止が効かないためピン合わせが非常に難しい。暗いのでマニュアル露出、マニュアルフォーカシングで撮影せざるを得ない。苦労する。メジロはじっと睨めつけるようにカメラを見て警戒する。

毎朝メジロの観察が朝食時の我ら夫婦の日課になった。都合のいいことにリビングのガラス戸の際に立つと丁度目の高さがメジロの巣の高さに合致する。メジロの巣は、まるできんちゃく袋の紐を緩めて、開口部を開けたような形をしており径が8cmくらい、深さが10cmあるかないかの球形をしている。底の奥深いところに卵があるようだが、残念ながらのぞき込むことは出来ない。さて、何個あるのだろうか。

時間にしてどれ位だろうか、雄雌交代で卵を温めているようだ。時に 2 羽ともいなくなって巣が放置されることがあると、どうしたのか、卵は大丈夫なのか、と心配になる。それにしても自然界の不可思議には感動を感じる。我が掌に乗るような小さな生物がどのようにしてこんな大きな、そして数羽の小鳥の重さを支えることのできる構造物を作れるのだろうか。たった 2 本の細い枝にぶら下がっているだけの構造である。抱卵中にも雷雨があった。暴風の夜もあった。心配で朝、目が覚めると真っ先にチェックして安堵する毎日が続く。感染症蔓延で当方もここ数ヶ月は自宅に蟄居中、メジロも文字通り巣籠だ。



Fig.5

5月23日、急にメジロの動きが活発になった。頻繁に巣を出入りし、どこかに飛んでいく。代わる代わる親鳥が嘴に何かを咥えて巣に還ってくる。どうやら孵化したのではないかと。じっと観察していても何とも分からない。巣の奥底の方で多分雛がうごめいているのではないだろうか、と推測するばかりである。

5月27日、やっと雛の頭が巣の上に見えた (Fig.5)。親鳥が頭上にいる。盛んに餌を求めている。嘴の数からどうやら 3 羽は確認できた。餌を口に入れる決定的瞬間を狙うが、あまりにすばやくてシャッターのタイミングが合わない。成功した一枚は、親の嘴を雛が口全体でくわえ込むような絵になった (Fig.8)。こちらの思うようなポーズにはならなかった。毎朝、観察と撮影を続ける、そして日中も様子を見ては何か面白い絵ができないか、と隙を見てはカメラを向ける。結構楽しい。



Fig.6



Fig.7



Fig.8

この時期木の葉はどんどん大きくなる。メジロはそれを承知で巣作りをしたのだろう。見える位置、角度が変わり空間が小さくなる。観察者には大変厳しい。僅かな隙間を狙って 400mm 以上でも撮影。雛も目が見えるようになってきたらしく、カメラを向けると、巣の中に身体を隠してしまう。親鳥が雛を抱えるように、恐らく身体を温めているのだろうか、可愛らしいポーズの写真 (Fig.9) を撮ることが出来た。もう恐らくかなり毛が生えているのではないだろうか (Fig10. 11)。



Fig. 9



Fig.10



Fig.11

5月30日、昼過ぎに庭に出る。もうメジロも当方に大分慣れているのではないかと厚かましく木の傍に近寄って撮影しようとカメラを構えると、いやに後ろが騒がしい。振り返ってみると背後の百日紅の木の中を親鳥が2羽、チチチ、チチチと大きく囀りながら慌ただしく枝移りをして騒いでいる。カメラを構えなおして狙っていると、雄の方だろうか、今までに見たことのない行動をする。身体を大きく膨ら



Fig.12



Fig.13

ませたり、片羽を扇のように開ける仕草を繰り返す (Fig.12,13)。恐らく小生に向かって、「どけ、そこをどけ」と威嚇しているのではないだろうか。メジロは初冬から早春にかけて我が庭によくやってくるのでリンゴなど果物を置いておくのだが、非常に警戒心が強く、カメラを向けただけでサッと飛び去って行く。今日のようにほんの近くで、カメラを構えた目の前で、こんなダンスを見せてくれるとは。夢中になってシャッターを切った。Fig.14はその一枚である。こんなメジロの姿を見たのは初めてだ。全身の毛を逆立て身体全体が2倍ほどに見える。自身を大きく見せて脅しているのだろう。子を守る親の一心というところか。申し訳ない気持ちになってこの場を去ることにした。

翌日、31日。朝、巣を覗くと何となく様子がおかしい。向かいの百日紅の木にメジロが数羽、バタバタしている。「あれ、昨日と同じだ」と思い、とりあえず1枚と思って巣に向かってシャッターを切った。

)



Fig.14

その1枚 (Fig.15) がこれ。どうやら巣立ちをする最後の1羽のようだ。画面右上に大きなギョロ目が見える。上からまさに背中を押すように親鳥が巣立ちを促しているのだ。朝早くから次々と巣立ちをして行ったのだろう。結局、何羽の雛が旅立ったのか分からなかったが恐らく4羽だったのではないかと思う。

以上が約3週間強にわたるメジロの子育ての顛末である。朝食を摂りながら「淋しくなったわね。あなたも仕事一つなくなったわ」と妻が言う。確かにまるで子供がいなくなったような寂しさを感じた。さて、今度はこの時間を何で埋めるか？メジロ一家は「新しい生活」を始めたが、緊急事態宣言が解かれたとはいえ当方は未だ外出自粛の蟄居生活を続けている。

(了)

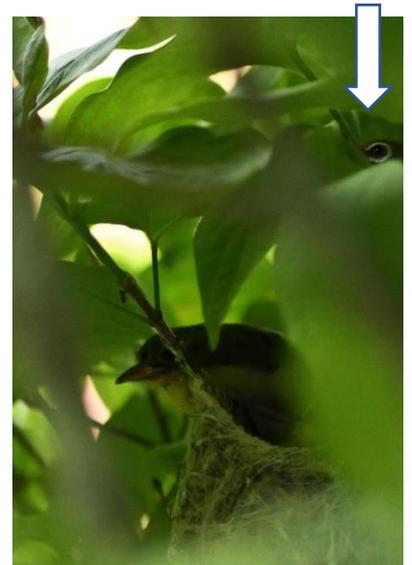


Fig.15